

征討

王他魯每ヲ滅シ、山南四年始テ全島ヲ併有ス、十二年、尙巴志卒シテ、子尙忠立、將軍義教薩摩ノ守護島津忠國ニ琉球ヲ賜ヒ、其附庸トナス、嗣後島津氏ト聘使來往シ、歲時ヲ以テ方物ヲ將軍ニ獻ズ、是ニ於テ内地及明ニ兩屬ス、尙忠ヨリ五傳シテ尙徳ニ至リ、國亂ル、文明元年、尙徳卒シ、國人世子ヲ廢シ、義本ノ裔尙圓ヲ奉ジテ王トナス、後六世尙寧ニ至リ、使聘ヲ修セズ、慶長十四年、島津家久將軍徳川秀忠ニ請ヒ、將ヲ遣テ之ヲ伐チ、尙寧ヲ擒ニシテ歸リ、將軍ニ謁ス、將軍命ジテ永ク島津氏ノ附庸トナシ、世々貢禮ヲ修セシム、明治五年、尙寧ノ後十二世尙泰、職貢ヲ修ス、詔シテ藩王ニ封ジ、國ヲ西海道ニ屬ス、

〔琉球入貢紀略〕薩州太守島津氏琉球を征伐す

琉球國は、嘉吉年間足利義教の命ありてよりこのかた、世々薩州に附庸の國たるを、天正のころ、群雄割據の時にあたりて、琉球の往來も姑く絶えたりければ、薩州の太守島津家久より、もとの如く貢使あるべきよしを、再三使をもていひつかはしけれども、彼國の三司官謝那といふ者、竊に明人と事を議りて、待遇ことさらに無禮なりしかば、已むことを得ずして、慶長十四年の春、台命を蒙、軍を起し、樺山權左衛門久高を總大將とし、平田太郎左衛門益宗を副將とし、龍雲和尚を軍師とし、七島郡司を按内として、その勢都合三千餘人、戰船百餘艘を出して、二月廿一日、纜を解きて、琉球國へ發向せしむ、樺山久高總勢を引卒して、はじめ大島に著岸し、また徳島に赴きしに、島人これを防もの凡千人ばかりなり、この戦ひに首を獲ること三百餘級、餘はみな降人にぞ出にける、四月朔日、那覇の港に至らんと、かのところに赴くに、港口には逆茂木亂杭をかまへ、水中に鐵の鎖をはり、是に船のかゝりなば、上より眼の下に見おろして、射とるべき手だてをかまへ、その外の島々へも、用意おごそかにしてぞ待かけたる、これによりて他の港より攻入りて、三日の間せめ戦ひ、手負討死少ならずといへども、遂に進みて首里に攻入り、王城を圍みて、急にも